The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	言語はどの程度規則に支配されているか : ヴィトゲンシュタインをよりどころとして
Author(s)	丸田, 健
Citation	年報人間科学. 1996, 17, p. 175-193
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7731
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

言語はどの程度規則に支配されているか

——ヴィトゲンシュタインをよりどころとして——

丸田　健

〈要旨〉

Wittgensteinの影響を強く受けた分析系哲学では、言語とは本質的に規則に関するものだという前提が広く共有されているようである。この前提は、言語における規則の役割についての強い見解を生む。それは「言語の隅々にまで規則が浸透しており、言語は我々が従う規則を通してのみ、言語として機能する」と表せる見解である。本稿の目的は、この見解に疑問を唱え、言語とは必ずしも規則に関するものではないという、より弱い立場を弁護することである。議論はWittgensteinの著作に基づいて行われるが、主張の意図は一般的であるよう心掛けた。

まずWittgensteinの「私的日記の議論」の標準的解釈に、規則についての強い見解を見い出すことを試みる。この解釈では、日記の記号「E」は意味を説明する公的規則を欠くために無意味だとされる。そのような記号が意味を持つことは、強い見解と矛盾する。次に我々は、Wittgensteinが二次的意味と呼ぶものに言及し、様々な例を紹介しながら概念的特徴を描写する。そして語の二次的使用では、強い見解が要求するはずのところに規則が見当たらないことを指摘する。最後に「感覚日記の議論」に戻り、二次的意味の考察を踏まえた別の解釈を提案する。そこでは、条件付きで、語の二次的使用と日記での「E」の使用には明確な境界線が引けないと主張する。「E」を一刀両断的に無意味とする解釈は、早急で疑わしく思われるのである。

キーワード

規則、意味、ヴィトゲンシュタイン、「感覚日記」、二次的意味

1. 感覚日記の議論(*)

「言語的転回」の後、哲学者の関心は言語に注がれることになった。この関心は二つの方向へ発展できよう。一つは言語使用に批判的注意を払うことで、伝統的哲学を訂正しようとする方向である。が、もう一つは、人間の思考の道具である言語それ自体をあるがままに観察することで、言語そしてその使用者である人間への理解を深めようとする方向である。さて、学者たちが言語分析的に形而上学批判をする際に使う言語を、二つめの関心でもって眺めたとき、彼らの言語は、日常で使われる言語と一致しているかどうかを問題にできる。哲学者が形而上学批判の道具として用いる言語はそれ自身、ある哲学的先入見を含むだろうか。

ヴィトゲンシュタインの影響を強く受けた言語哲学では、次のような了解が広く共有されている。すなわち、言葉を話すことは規則に従う活動である、と。この考えは弱くも強くも主張できる。強く主張された場合、それはこう表現される――「言語の隅々にまで規則が浸透している。そして言語は、我々が従う規則を通してのみ、言語として機能する。」

ここで規則とされるものについては注意がいる。言語の規則（かなり広い意味での文法）が、論理学・数学にあるような形式的で厳格なものであることはまれである。言語表現には、互いに支えあう種々の規則があり、ある規則が時に無効である際には、別のものが適用されうるからだ。また規則と言えばさしあたり、ある言葉の使用を教えるためのものだと思われるかもしれない。その場合、それは言語的定義の形をとる以外に、直示的定義や例の羅列でもありうる。しかしここでの規則には、教授の際の道具であるほかに、関心をもって眺める観察者が実際の言語使用から読み取るまで、一般に意識されていないものまでも含まれる。

規則が言語使用から読み取られることがあるとはいえ、それは科学の経験則とは性格を異にする。文法規則に従うことは、規則的に従うことのほかに、規範的に従うことだからだ。例えば天体はある軌道を規則的に運行するが、その軌道を外れても間違いをしたとはされない。それに対し、文法規則を外れた言語使用は間違いであり、文法の規範性を理由に訂正が求められる。

さて「規則は言語の隅々にまで行き渡り、言語が機能するのは規則を通じてのみである」という規則についての強い立場は、「私的言語論」にある感覚日記の議論の一解釈に、もっとも強く、かつ否定的な形で表れる。以下に、この議論の全文を掲げる。

次の場合を想像してみよう。私はある感覚が繰り返し起こるのを日記に付けたい。そのために私はそれを「E」という記号と結び付け、その感覚が起こる日にはこの記号をカレンダーに書き込む。

――最初に言っておくが、この記号の定義を作ることはできない。

――けれども自分に一種の直示的定義を与えることはできる！――

――どうやって？その感覚を指し示すことができるだろうか。――

普通の意味ではできない。けれど私はその記号を口に出したり、書き出したりして、同時にこの感覚に注意を集中するのだ――だから言ってみればそれを内的に指し示すのだ。――けれどこの儀式は何の役に立つのだろう？というのもこれはそれだけのものに過ぎないように見えるからだ！定義というものは確かに記号の意味を与える役目をするものだろう。――よろしい、それはまさに注意を集中することでなされるのだ。というのもこうすることで私は記号と感覚のつながりを自分自身に刻み込むからだ。――しかし「それを自分自身に刻み込む」ということは次のことしか意味しないだろう。このプロセスは私がそのつながりを将来正しく覚えていることを引き起こす。けれど今の場合、私には正しさの基準がないのだ。「私に正しく見えることは何でも正しいのだ」と言いたくなるかもしれない。そしてそれは我々はここで「正しさ」について話すことができないということにほかならない（PI 258）。

言語規則についての強い立場に立った解釈とは、日記の記号「E」には規則（正しさの基準）がないために、それを無意味だとするものである。[1] 以下ではまず、この解釈を解説したい。

この立場からすれば、この議論は、使用の規則が与えられない記号に意味があるのかという問いを扱っている。そこで記号「E」が現れるのだが、その使用については公的説明である定義が与えられない。それに代わるものとして、私的規則である内的直示的定義が登場する。ここでは「E」に私的規則が仮定されてこそ、この記号に意味があるはずだとされる。次に私的規則は果たして記号に意味を与えられるのかが問題になる。私的規則によって「E」に意味が与えられるとするかぎり、記号「E」はこの規則に従って使われることで意味を保つはずである。しかし規則が公的でないため、例えば私がそれに正しく従っているかを、公的基準に照らして確認することはできない。つまり「私に正しいと思われることが正しいのだ」と言うしかない事態が生じる。私が規則に従っていると思うことが、即、私が規則に従っていることだ、となるのである。

ところが規則の概念にとって、それに従っていることと、それに従っていると思っているだけのことの間の区別は不可欠である。さもなければ「＋2」の数列を例の計算者（PI 185ff.）がどう展開しようと、彼が正しいと思う展開が正しいということになろう。これを認めると、規則の規範性が失われ、規則の概念が根底から崩れることになる。私的規則の考えは、従うことと従っていると思うことの区別を葬り去るがために、規則とは言えないのだ。「よって規則に「私的に」従うことは不可能である」（PI 202）。ここで私的規則の概念を否定することは、「E」に意味を与えるとされたものを否定することにほかならない。つまり「E」は背理法的議論によって無意味とされる。この記号は公的規則がないものとして登場し、それに意味を与えるために私的規則が仮定された。しかし私的規則の概念は規則たりえず、結局この記号には規則がないこととなった。よって「E」は無意味となるのだ。

以上、記号は規則を通してのみ意味を持ち、説明規則のない記号には意味がないとする、規則についての強い立場を概観した。使用規則を欠く記号は、隅々まで規則が支配しているとされる言語の網の目の中に、位置づけられないのである。

2. 二次的意味

規則と意味について考えるにあたり、次に言語使用のある現象に話題を移したい。ヴィトゲンシュタインはこの現象に「二次的意味(sekundäre Bedeutung)」という用語を当てている。もっとも、彼はこの現象について充分に踏み込んだ議論をするには至らなかったかもしれない。しかし私は、ここで問題にする言語使用は、言語の規則についての別の角度からの考察に端緒を与えるものだと考える。「二次的意味」という用語は、感覚日記の議論を含む『哲学探究』第一部とは別の時期に書かれた、第二部の方で登場するが、『茶色本』で既に次のことが書かれている。この箇所では、様々な例を通して「より暗い」・「より明るい」の使用を教えられた生徒が話題になっている。

…さて彼は、ある一連のものを、暗い順に並べよという命令を与えられる。彼は、本を並べたり、動物の名前の列を書いたり、そしてu、o、a、e、iの順で五つの母音を書き出すことで、命令を実行する。我々は彼になぜ最後のものを書いたのかと尋ね、彼は「だって、oはuよりも明るくて、eはoよりも明るいもの」と言う。——我々は彼の態度に驚くが、同時に彼の言うことに何かがあると認めるのである。おそらく我々は「けれど見てごらん。eは確かに、この本があれより明るいという仕方で、oより明るくはないだろう。」——しかし彼は肩をすぼめて「分からないけど、eはoより明るいでしょう?」と言う(BB pp.138-9)。

ヴィトゲンシュタインは、これと似た言葉の使用例をほかにもあげている。例えば母音を「明度」で考えるだけでなく、特定の「色相」と結びつける人がいる(「私にはeという母音は黄色い」(PI p.216g))。また母音は、幾度も繰り返されると色を変えることもある(「私にとって、母音aは青だ…けれど今はaは赤色だ!」(PI p.202g))。さらに太い曜日と痩せた曜日の話がある。「「太い」と「細い」という概念を与えられて、君はどちらかというと水曜日は太く、火曜日は細いと言うほうに傾くか、それともその逆か。(私は断固として前者の方に傾く。)」(PI p.216c)

ヴィトゲンシュタインが、これらの語の使用を明らかな規則違反・無意味なものとしていないことは、重要である。ここで、ある生徒が数列+2を規則に従って展開する、あの場面が思い浮かぶ。彼は例を通して+2の足算を学び、その操作を1000まで訓練・テストされる。それから彼は同じ操作を1000から続けることを命じられるが、彼は1000, 1004, 1008, …と書き始め、ヴィトゲンシュタインは驚いて口をはさむのだった。「なんということをしたのか見

てみたまえ！」と。しかし生徒に「より暗い」という言葉の「展開」をさせ、生徒が様々なものに加え、音を「暗い」順に並べるという具合に作業を続けるとき、ヴィトゲンシュタインは生徒をたしなめないどころか、生徒がしたことに何かを見て取るとさえ言うのだ。

規則について考えるなら、次のように言えるだろう。例を通して訓練された生徒が＋2を…, 996, 998, 1000と続けるのは、様々な視覚の例を通して訓練された生徒が、本を表紙の暗い順に並べるのに似ているが、彼が母音を「暗い」順に並べることは、＋2を1000, 1004, 1008, …と続ける突拍子なさと似ている、と。

さて二次的意味は、例を通して既に考察へ導入されている。すなわち「ある母音は別の母音より明るい」などと言うときの「明るい」・「暗い」、「ある母音は黄色い」と言うときの「黄色」、「水曜日は太い」と言うときの「太い」・「細い」といった語は二次的意味で使われている。それに対し「昼は夜より明るい」、「レモンは黄色い」、「彼は太っている」という表現での同様の語は、一次的意味を持つ。

次に二次的意味の概念的特徴の説明に移る。[2]

（1）ある語を二次的意味で使えるのは、その語の一次的意味を既に学んだ者に限られる。ヴィトゲンシュタインは二次的意味を次のように規定している。「語が人に一次的意味を持つかぎりにおいて、彼はそれを二次的意味で使用するのだ」（PI p.216e）。

（2）一次的意味で使用された語と、二次的意味で使用された語がそれぞれ適用される対象は、互いに大いに異なる分類に属する。太い人とは身体的存在であり、見たり、触れたり、重さを計ることができる。太さという性質は、そうして人間に与えられる。しかし太い曜日には、以上のような性質がない。その意味で、太い人と太い曜日は別々のカテゴリーに属するのだ。この点が、二次的意味が引き起こすかもしれない奇異な印象をいくらか説明するだろう。異なるカテゴリーに属し、共通点がないと思われるものに同じ語が使われているからだ。このことから二次的意味では、論理や理性が揺らぐようにも見える。

（3）一次的意味と二次的意味では、語の使用が異なる。例えば曜日に使われる「太い」・「細い」という語は、人間に使われる場合とは異なる使用を持つ。（「それらには異なる使用があるのだ」（PI p.216c）。）これは曜日と人間の間のカテゴリー差を考えると納得がいく。体型の幅広さを基準に用いられる「太い」と、体型を持たない曜日に用いられる「太い」の使用には確かに違いが認められる。

（4）一次的意味と二次的意味では語の使用は異なるが、意味が変わるとは言えない。例えば曜日に使われた「太い」と「細い」の語は、人間に使われる場合とは意味が違うとは言えないのである。

これは重要かつ微妙な問題である。たしかに一方では、一次的意味と二次的意味は異なると言いたくなる。二つの意味では語の使用が異なるからだ。しかし一次的意味と二次的意味について、使用だけでなく意味もまた異なるのだと、二つの意味を分断してよいだろうか。次のことを考慮にいれたい。ヴィトゲンシュタインが一次的意味と二次的意味とでは語の使用が異なるとしたのは、実は二つの意味は異なるのかという問いに答えてそう言ったのである――「さ

て「太い」と「細い」には、ここでは［曜日に使われたときには］普通とは異なる意味があるのだろうか。――それらには異なる使用があるのである」。この問答は、互いに要点がややずれているように見える。なぜ異なる意味について問うて、わざわざ異なる使用について答えるのだろう。理由はヴィトゲンシュタインの次の言葉に見い出される。「私はここで、これらの語を（それらのよく知られている意味で）使いたいのだ」（PI p.216c）。つまり曜日に「太い」・「細い」を用いるとき、これらは普通のよく知られた意味で、例えばこれらが人に使われるときの意味で、意図される。二次的使用では、語をこう使いたいために、一次的意味と二次的意味とでは意味は変わらないとしたいのだ。これは、二次的意味には同音異義語の考えが当てはまらないことを示している。[3]

項目（4）は項目（1）と関連がある。「太い」の場合、よく知られた意味とは「太い人」といった表現での意味であり、これは「太い」の一次的意味である。そして「太い曜日」で、「太い」という語を同じ意味で意図すると言うとき、ここに「太い」の一次的意味の習得が前提されている。こういう仕方で二次的意味での語の使用は、一次的意味の理解に依存している、あるいは寄生的なのだ。

（5）二次的意味は、他の語で表せない。一次的意味と二次的意味では語が異なる使用をされるという点について、ヴィトゲンシュタインは、ならば別の語を使うべきだったかと自問するが、彼は、決してそうではない、水曜日が太いと言うなら、ここではこの「太い」という語を使いたいのだ、と答えている。すなわち、ここで「太い」という語は別の語に還元できないのだ。[4][5]

3．二次的意味と規則

ヴィトゲンシュタイン研究で、二次的意味の概念が哲学者たちの関心を引くことは比較的まれだったが、二次的意味の非還元性は、この意味が、一次的意味で表せない意味を表すことを示している。したがって二次的意味という領域の考察は、言語使用についての展望に深みと広さを与えるはずである。言語を対象とする哲学の目的の一つが、言語とそれが表現できることの全体像を得ることなら、我々の考察に二次的意味が含まれることは歓迎すべきである。そして結論をほのめかしておくなら、二次的意味は言語規則に関する認識に、ある示唆を与えてくれるはずである。

二次的意味の概念が注目されてこなかった理由の一つに、ヴィトゲンシュタインが「水曜日は太っている」、「母音eは黄色い」といった例を用いたことがあげられる。二次的意味の重要性を認める学者たちは、これらの例の選択を不幸だとしている。こういう言葉の使用は興味深いかもしれないが、伝統的な哲学の問題とは無関係に見えるため、せいぜい戯れの関心しか値しないように思えるからだ。既に触れた二次的意味の諸例がそれ自体では哲学的関心を引き付けにくいのはもっともなことかもしれない。しかしこれらの例の選択を不幸とするのでなく、肯定的に解釈することもできる。ヴィトゲンシュタインが戯れ言に過ぎないものを探究しようとしたとは考え

にくい。たしかに二次的意味は戯れ言に取られかねないほど「奇妙」にも見えよう。だからこそ、言語使用の多面的展望を得たいなら、この「奇妙さ」に加え、哲学的議論の可能性を明らかにはらんだ二次的意味をいきなり取り上げるよりは、哲学の問題から極力離れた二次的意味の例でこの概念を確認しておく方が、多くの哲学的偏見から自由でいられるのである。二次的意味をこのように確認しておいてこそ、哲学的議論が有益になりうる。

誤解のないよう付け足すなら、曜日の太さや母音の色でさえも、運がよければ哲学的考察の補助となりうる興味深い現象であるのではない。このことはランボーの有名なソネットを思いだせば理解できるだろう。「Aは黒」で始まるこの「母音」という詩では、母音と色の結び付きが詩として表現されている。これは二次的意味が芸術的創造として現われうることの一例である。

哲学での二次的意味の議論の可能性にも触れておくと、幾人かの哲学者は言語使用の様々な領域で、二次的意味の観点からの哲学的考察を試みている。B.R. Tilghmanは美学における語の二次的使用を記述し、Cora Diamondは倫理学や宗教の問題を二次的意味に言及しつつ議論している。またOswald Hanflingは言語使用を広く見渡し、多くの二次的意味の例を見つけようとしている。[6]

さて、二次的意味の概念をおおまかに弁護したうえで、二次的意味と規則の連関について考えていきたい。既出の例を見ると、二次的意味は、言語の規則についての強い立場に対し再考察をせまるかのようである。それらの言葉の二次的使用には、隅々にまで規則が浸透しているとは思えないからだ。例えば曜日に対する「太い」の適用は正しさの基準を持つだろうか。この適用を規則で説明できるだろうか。ここで二次的意味における規則についての、研究者たちの見解を引用しておこう。M.ter Harkは「…二次的使用は、基準を基に正当化はできない」[7]と書いた。またTilghmanは二次的意味について次のように述べている。

> …語の適用を支配する、いつもの類の理由や基準は、その語の新しいものへの転移を説明できない。
>
> …二次的意味で語を新しい対象へ適用することを正当化する基準は存在しない。もし二次的使用をされる語が意味を変えないなら、そしてもし一次的適用と二次的適用の対象に共通するものが何もいらないなら、語の二次的使用に基準がないことが明らかに導かれる。そのように語を使うことについて、説明もなければ理由もないのである。[8]

以下では上の引用のポイントが、ヴィトゲンシュタイン自身が扱った、言葉の二次的使用の別の例にも当てはまるかを確認する。

「頭の中で計算する（kopfrechnen, im Kopf rechnen, すなわち暗算する）」という表現がある。この表現が「水曜日は太っている」のような意外性を持たないことは重要でない。ヴィトゲンシュタインは「頭の中の計算」についてこう書いている――「我々によく知

られた語の組合せということが、この言語ゲームを根底から探究することの妨げとなってはならない」(RPP1 665)。彼によれば、「紙の上でにしろ口頭でにしろ、計算をすることを学んだ者のみが、計算というこの概念を通して、頭の中で計算するとはどういうことかを把握できるようになるのである」(PI p.216f; cf. LW1 801; LW1 802, 804; PI p.220d, LW1 857)。「水曜日は太っている」と同様、人は外的計算を習得したときのみに、頭の中で計算するということを理解するようになるのだ。『哲学探究』と『心理学の哲学についての最後の手稿1』で、この主張は、「水曜日は太っている」の例、および語の一次的・二次的意味の区別の導入の直後にある。つまり暗算の概念は二次的意味の考察の文脈で扱われている。明らかにヴィトゲンシュタインは「頭の中での計算」における計算概念は二次的だと考えている。暗算の概念は(外的な)計算の概念に寄生的なのである。

頭の中での計算(二次的)が、紙の上や口頭での計算(一次的)の理解を前提しないことがあるだろうか。ここで外的計算を持たない社会で育ったにもかかわらず、暗算ができる人間を想像してみる。「それゆえ我々はこれを、いわば境界的ケースとして記述せねばならない」(PI 385)。ヴィトゲンシュタインは続けて述べるのだが、「…次のような疑問が生じるだろう。我々はここでなおも「頭の中での計算」という概念を使おうとするだろうか、あるいはそのような状況ではこの概念は目的を失ったとするだろうか。というのも現象は別のパラダイムに傾いているからである。」このような人間は、数学の複雑な問題の答えを出せるが、その答えをどうやって得たかを説明できない、いわゆる「白痴の天才(idioit savant)に比較できよう。この場合、答えは我々が計算と呼ぶところのプロセスによって得られたと言えるだろうか。むしろ、そのような人がすることは計算の奇妙な「カリカチャー」に見えるのであり、彼に我々の計算の概念を適用することには問題があると考えられる(cf. RPP2 212, Z 89; cf. PI 342, Z 109, RPP2 214(バラード氏))。[9]

次に頭の中での計算という概念がはらむ問題を指摘したい。まず暗算概念の日常的使用を確認しておくと、例えば買い物の精算の際、店主は品物の値札を見て合計金額を請求する。この合計の根拠を尋ねるなら、彼は頭の中での計算のことに触れるだろう。そして紙の上で計算してみると、彼の合計額が正しいことがわかるだろう。だが店主が頭の中で計算したのだと言うとき、彼は本当に計算をしたのだろうか。例えば、実は正しい答えがあたかも魔法のようにやってきたのに(例えばidoit savantが答えを出すように)、彼は自分が計算したと思い込んでいるということがあればどうだろうか。これに対し「そういうことはあるのかもしれない。しかしそれは全く不可思議なことであり、我々はそれがどのように起こったかを説明できないだろう」という反論がありうる。ヴィトゲンシュタインの返答は次のようなものだろう。「一言も言わずに、また紙に書き出すことなしに、彼が計算することができた、ということも充分に理解しがたくはなかろうか」(PI 364)。[10]

もし問われれば、我々はおそらく「暗算では、紙や口を使ってす

るのと同じことを頭の中でするのだ」と答えるだろう。しかし規則の観点から考えるなら、「同じ」で示される、紙の上や口頭から頭の中への、計算概念のこの移行を説明する規則があるのかどうかが問題になる。ここでヴィトゲンシュタインが別の文脈で書いた文章を考慮すべきである。

…「君はもちろん「ここは5時だ」がどんな意味かを知っているだろう。だから「太陽の上は5時だ」がどんな意味かも知っているのだ。それはただ、そこでの時刻が、ここで5時であるときと同じだ、ということを意味している。」――同一性による説明は、ここでは機能しない。というのも私は、ここでの5時とそこでの5時が「同じ時刻」と言えることは十分よく承知している。しかし私が知らないのは、どのような場合に、こことそこでの時刻が同じであることを語るべきかということなのだ。(PI 350)

おそらく論理学者はこう考えるだろう。同じというのは同じということなのだ――同一であることをある人が納得するかどうかは心理学的問題である、と。(高いは高いだ――人がときには高さを見、ときには聞くということは心理学の問題なのだ。)(PI 377)

これらの箇所の一般的解釈は次のようなものだろう。始めの引用は、地球上のある場所で5時なのと同じ意味で、太陽の上で5時なのだと言ったところで、太陽の上での時刻という概念の説明にはならないことを主張している。太陽の位置を基準に時間帯ごとに定められている地球上の標準時を、太陽自身に当てはめようにも、地上の標準時の太陽への適用基準はまだ準備されていないのだ。したがって太陽での5時が地上での5時と同じと言っても、それがどう同じなのかは全く不明であり、このかぎりでは「太陽で5時」という表現は意味をなさない。

次の引用は、「何をもって同じとするかの基準なしに、同じは同じであり、同じの意味は決まっている」という考えを批判している。高さについても変わりはない。我々は山が高いことを見ることもあれば、音程が高いことを聞くこともある。しかし高さの概念は山の高さや音の高さと無関係に与えられるのではない。視覚的な高さには独自の基準があり、聴覚的な高さにも独自の基準がある。これらと切り離して高さについて話すことはできない、というわけである。

頭の中で計算するということは、どう説明できるのだろうか。我々は頭の中の計算を「指し示す」ことはできない。だから「頭の中での計算」という表現の中で、計算という概念がどういう意味を持つかを尋ねられれば、我々は外的な計算というパラダイムに頼るほかない(cf. PI p.216d)。そこで我々の疑問は「例えばこの場合、私はこれと、これと、この数字を足して…」と言うことで答えられるとしたくなる。これはつまり、口頭や紙の上での計算と同じことを、ただ頭の中でするのだ、という答え方である。しかし「それは我々の疑問の答えにはなっていない。頭の中で足し算をすると呼ば

れるものが何であるかは、そのような答えでは説明されない」（PI 369）のである。なぜなら外的に計算するということがさしあたり十分明らかであるのに対し、我々の問いはそれを頭の中で、つまり声に出したり紙に書いたりせずに、するということがどういう意味なのか、ということだからだ。

暗算で正しい答えを出すことは、idiot savantのように我々におよそ縁遠い仕方で正しい答えを出すこととは直観的に異なる。このように、正しい答えが出さえすれば暗算をした、ということにはならない。暗算においては、筆算や口頭算ですることを、頭の中でする、と言いたいのであり、このように言える人にのみ暗算を帰することができる。しかし頭の中での計算が紙の上などでの計算を前提するにもかかわらず、後者から前者への転移の規則は明らかでない。「太陽の上で5時」の議論は、ある既成の概念を新しい領域に転移する際には、転移の方法を説明するものが必要だとしている。しかし計算の概念の二次的使用では、そういったいつもの類の理由や基準によって、転移を説明することはできないと思われる。にもかかわらず、我々は紙の上での計算と「同じ」ようなことを頭の中ですると言いたくなるのだ。暗算の概念の場合、このような点が規則についての強い立場に疑問を投げかけるのである。

4. 感覚日記再考

我々は二次的意味の概念を通し、文法規則（語の定義や説明、使用基準など）で説明できるとは言いにくい言語使用を考察した。この概念は、言語には規則があるという考えとは矛盾しないが、言語には隅々にまで規則が行き渡り、言語表現は規則を通してのみ意味をなすという強い主張とは矛盾する。ここで、なぜ意味が規則を通してのみ成立すると最初に考えられたのかを問うてみてもよい。文法規則についての強い立場に関しては、ヴィトゲンシュタインの表現を真似てこう言えるかもしれないのだ。我々が実際の言語を子細に検討すればするほど、それと文法規則についての強い立場からの要請との対立は明らかになる。というのも規則を通してのみ意味が可能だという論理的純粋さは、探究の結果得られたものではなく、要請に過ぎなかったからだ、と（cf. PI 107）。

ただし指摘しておくべきことがある。考えるに、我々の言語には考察されたもの以外にも二次的意味は多く見つかろうが、「太い」の曜日への適用や、計算概念の紙の上から頭の中への転移を説明できる規則らしきものが二次的意味には見い出せないからといって、これは決して我々の言語が無秩序であることを意味しない。したがって、この点で二次的意味を恐れる必要はない。言語を用いて現に多くのことができるからには、言語にはもちろん秩序がある。さらに二次的意味での言語使用が認められることと、言語表現のどんな組合せもがまかり通ることは同じなのでもない。実際、日常言語では単語のどんな組合せもが流通しているのではない。しかし言語使用で何が通り、何が通らないのかの境界は、哲学があらかじめ決定できるのではない。

さて、この章では感覚日記の議論に戻り、それを再考察したい。この議論の一般的解釈によれば、日記の記号「E」は公的規則を欠くために無意味となるが、我々は二次的意味の概念を通し、公的規則で説明することが困難な意味があることを知った。規則は、かならずしもある表現が意味を持つための必要条件ではないのだ。この点を考慮すると、ある記号が使用の公的規則を持たないために無意味だとする議論は、議論の基盤を脅かされることになる。これを踏まえながら、感覚日記の議論の再検討を試みたいと思う。

記号「E」を無意味だとするのは一つの解釈だが、それがヴィトゲンシュタインの意図するものだったかは、テキストに即して考えても、疑ってみる余地はある。感覚日記の議論やそれに直接関連する節のどこを探しても、彼は「E」が無意味だとは断言していないからだ。彼が下している結論は「E」については「我々は「正しさ」について話すことができない」ということだけなのだ。この結論から、正しさについて話せない言語使用は無意味だという、より強い結論を導くのは妥当だろうか。ヴィトゲンシュタインの言葉をあくまでも額面通りに取るなら、彼はここで「E」の意味・無意味については結論を開けたままにしている。

（正しさの基準に関連して、次の言語使用を思い浮かべてみてもよい。夢の内容報告[11]や、痛みの質の記述[12]での言語使用である。我々は自分の痛みがどんな感じかを「正しく」記述するのだろうか、また自分が夢見たことを「正しく」報告するのだろうか。そのときの正しさの基準とは何だろうか。また正しさの基準がなければ、これらの言語ゲームは無意味になるのだろうか。）

さて記号「E」が無意味とされるなら、それには議論で「E」という記号を用いたことに一因があろう。というのもこの記号がいかにも人工的なため、それを無意味とすることに何のためらいもいらないように思えるからだ。もっとも感覚日記では定義できない感覚が問題とされるので、人工的記号の登場はそれなりの理由があってのことだが、議論の設定上、公的規則を欠く「E(mpfindung)」という表現は「公的に定義できない感覚」、「公的に説明できない感覚」などという表現と同じである。したがって記号「E」が無意味かどうかの問題は、「公的に定義・説明できない感覚」という表現が無意味かどうかの問題である。こう考えると「E」を無意味と断定するのはそれほど容易でなくなるのではなかろうか。というのも曰く言いがたい、人に説明のしようがない感覚の体験などは、多くの人が体験することだろうからだ。これについては神秘的、宗教的体験に例を求めるまでもないのではないか。

「人に説明のできない感覚」という表現が日常言語に属するなら、これはいわゆる私的言語の表現ではない。我々はこの表現が「理解」できないとは言わないだろう。よって感覚日記の議論は、この表現を我々の言語から追放するものとして読まれるべきではない。この議論のポイントは別のところに見い出されるべきである。Hanfingは、ヴィトゲンシュタインをもじった次の対話によって、別の解釈を表わそうとしている。「すると君は「E」が何か意味を持っていることを否定するのだ。君はこういったことすべては理解不可能だ

と言っているのだ。」――「なぜ君は私がこれを否定したがっているという印象を持つのだろうか。私はただここで、我々に押しつけられる文法を拒みたいだけなのだ。」[13] この対話は別の解釈を方向づけてくれるものである。

感覚日記の議論で記録者は、日記の記号が自分自身説明できない感覚を意味するなら、それに意味があるなどと果たして言えるのかという疑問にさらされたのだった。この疑問に答えるべく、ヴィトゲンシュタインの対話者が引き受けたのは、私的な規則が意味を保証するという考えであった。私的な直示的定義によって、ある記号とそれが指すものとの連関を自分自身に刻印するという考えである。これと同時に対話者が背負ったのは、規則の規範性、つまり規則には従うことを要求するものがあるという性質、である。日記の記録に意味があるのは私的規則に依ってのことだと主張するなら、この規則が従うことを要求しているはずのことに、記録者は正しく従っている必要がある。すなわち私的規則を主張する者自身が、自分の正しさを要求せねばならない立場に立つのである。[14]

規則が私的な場合、それに従っているか否かの確認は公的にされない。となると当事者が規則に実際に正しく従っていることと、彼が正しく従っているつもりであることの区別ができなくなる。数列の展開を例にした、規則に従うことの考察で示された点の一つは、規則に従っていることと従っているつもりであることが区別できる場合にのみ、規則の概念に含まれる規範的性質が成り立つということだった。規範性を成り立たせるこの区別がなくなれば、規則の概念は崩れる。この理由により、規則に私的に従うことはできず、私的に従われる規則もありえないと結論されたのだった。

しかし感覚日記でヴィトゲンシュタインの対話者が要求するのは、まさにそのような規則によって、日記の記録に意味が与えられるということだ。そこでは記録者が私的規則に正しく従っていることと、正しく従っているつもりであることを区別できない。となると彼に正しく思われさえすれば何でも正しいことになり、「正しさ」について語ることが空虚になる。これは対話者の欲する結果ではありえない。なぜなら彼は日記の意味を保証するのに私的規則の考えを用いたため、それに従っていることと従っているつもりであることの区別から生じる正しさについて話すことができる場合にのみ、日記に意味があると主張できる立場にあるからだ。

慎重になるに値するのは、「このことは我々がここで「正しさ」について語ることができないことを意味しているに過ぎない（強調、筆者追加）」ことである。少なくともヴィトゲンシュタインは感覚日記の議論で、対話者が要求することになった正しさの概念を否定している。さらに正しさの要求の理由となった私的規則の概念も否定している。彼はこの議論で、対話者がとった私的規則という文法の考え、そしてそれが押しつける要請を否定しているのだ。しかしこれは、公的規則による説明が困難な感覚の記録可能性の否定になるだろうか。我々は正しさについて話せないに過ぎないのだ。

ヴィトゲンシュタインは実際、人が自分の感覚について話すとき、何か独立の基準に照らした正当化はされないと考えている。これを

示すために、彼が例えば痛みの感覚をどう説明したかを整理しておこう。ヴィトゲンシュタインは、他人の痛みに関する言語表現の使用基準については、これを彼の痛みの行動だとした。付け加えるなら、ここで行動の概念は、行動が起こる状況も含むと考えられる。それに対し、一人称的痛みの表現は、まず自分の痛みの原始的な行動につなげられ、やがてはそれと置き換わるものだとされた。一人称的・三人称的感覚帰属の論理に区別があるところに、ヴィトゲンシュタインの心の哲学の特徴の一つがある。

さて一人称的痛みの表現は自分の痛みを何かの基準によって同定することで使われるのか、そして痛みの表現はその基準に訴えることで正当化されるのか、という問いは「否」で答えられる。ヴィトゲンシュタインは「私はもちろん、自分の感覚を基準によって同定するのではない。そうではなく、私は表現を繰り返すのである」(PI 290) としている。痛みの自然な表出である、ある種の行動が、基準を参照した後であらわれるのでない以上、それと置き換えられる痛みの言語的表出も基準によって判断されるものではない。ここで痛みの一人称的表現には基準がないため、それを正当化しようとも訴えられるものは何もなく、当人はただ痛いから痛いと言うだけなのである。

これに対して三人称的痛みの表現——他者に痛みを帰属させる場合——では、上記の性格を持つ一人称的表現が基準となる。その際、一人称的表現が使われた状況も判断基準に加味されるのであり、痛みを表現するのが舞台上の役者だったり、仮病を装う動機がある者なら、彼の痛みは否定されたり、疑われたりする。他者への痛みの帰属に正当化が必要な場合には、これらの基準が引き合いに出される。

感覚の一人称的表現のこのような把握に従えば、人に説明できない感覚を日記に記録する人も「私がすることはもちろん、自分の感覚を基準によって同定することでなく、表現を繰り返すことである」と言えるだろう。

ヴィトゲンシュタインはこう述べている。「語を正当化なしに使うことは、それを不当に使うことではない」(PI 289)。この言葉は、痛みの一人称的表現には正当化が要求されないことに関連して書かれたのだが、この引用があてはまる言葉の使用例はほかにもある。二次的意味での語の使用がそれである。ヴィトゲンシュタインは、例えば母音に明暗の概念を使うことについて、こう書いている。

「…「何が君に「より暗い」という語を使わせたのか」という問いに対し、その答えはこうであろう。「何も私に「より暗い」という語を使わせたのではない——つまり、なぜ私がそれを使ったかという理由を尋ねるならば。私はただそれを使った…」」(BB p.136)。既に見たように「母音xは母音yより暗い」といった二次的意味での語の使用について、それを説明できる文法規則を見い出すことは難しい。したがって二次的意味で語を使うことに関して(論理的)理由を与えるのも難しく、また規則や理由に訴えて二次的意味を正当化することについても同様である。しかし語の二次的使用に正当化はないとしても、語をそのように使用する人に対し、使用の不当

さを責めることはできない。語を二次的に使用できる人は、その使用の「許可」とでも呼べるものを得ているのである。つまり、この「許可」は、該当する語の一次的意味を習得した者に与えられるものである。

さて「明るい」、「暗い」という語の一次的意味を学んだ者が、これらの語を二次的意味で使用するのが不当でないなら、「感覚」という語の公的に説明できる意味を学んだ者が、他人に説明できない感覚について記録を付けるということもまた不当ではないと思われる。なぜ「感覚」という語を使うのかと彼に尋ねれば、先程の返事と似たものが返ってくるだろう。このように、明暗の概念を色と結び付けて学んだ者が、それを正当化なしに二次的に使う場合と、感覚の概念を公的に学んだ者が、正当化なしに「人に説明できない感覚」という表現を使う場合との間に、明確な境界線は引けないように思われるのである。

語を正当化なしに、しかし不当ではない仕方で使うことは、そこで言語ゲームが終わることを意味しない。(「しかし、それで言語ゲームが終わるのではない。それは始まりなのだ」(PI 290)。) 図形や音楽のアスペクトを知覚できないアスペクト盲や、使用から切り離されて発せられた語の「意味を体験」できない意味盲にならい、語の二次的使用に意味を見て取れない人を二次的意味盲と呼べるが、二次的意味盲の人にとっては、誰かが語を二次的に使用する時点でこの言語ゲームは終わってしまう。しかし二次的意味に意味を見て取る人にとっては、言語ゲームはここで終わりはしない。彼はこの言語ゲームに加わることができるし、またそうすることで、彼にとっての言語の領域、意味の領域が広がるのである。人に説明できない感覚の記録についても同じである。この日記の意味に「盲目」な人は、記録者が正当化なしに、しかし不当とはいえない仕方で、記録を付けることを否定はしないかもしれないが、関心を持つこともないだろう。つまり、規則がないためにこの日記に意味を認められない人は、文法規則や公的基準、正当化などとはかかわらない観点から他者に対して関心を持つ準備のない人間なのである。しかし我々の考察の方向が正しいなら、「感覚」という語にも、隅々にまで規則が浸透している必要はないのである。

我々は文法規則を通してのみ言語表現は意味を持つという考えと、有意味な言語表現に規則が浸透している必要はないという考えを対比してきた。感覚日記の議論について考えるとき、この対比は見逃せない。ヴィトゲンシュタインの言葉の中には、確かに、文法規則を通してのみ意味が成り立つと主張しているとしか理解しにくいものがある。あるいはこのような考えも、彼の思考傾向の一つを表しているのかもしれない。しかし他方では、彼は文法規則では説明できない言語表現に意味を認めもしているのである。この考えを感覚日記の議論に適用してみる価値はあろう。意味は規則によってのみ確立されるという考えは、意味の検証主義にも似た、理論である。理論を仮定して哲学を進めることは、実際の言語使用を観察し記述するという、ヴィトゲンシュタインの大局的態度にはそぐわないはずである。規則という観点からの「一面的食事」を続ければ、

我々の言語観は歪んだものにならざるをえないだろう。この点に注意を促すことに成功したなら、本稿の目的は達せられたとしたい。

注

（＊）ヴィトゲンシュタインの著作からの引用は、以下の省略形を用いる。著作に節番号がふってあるもの以外は、頁数での引用である。PIの第二部の頁数に続くアルファベット記号は、一行スペースで区切られた段落のまとまりを表す。頁で引用する際に用いるのは、Blackwell版のテキストの頁番号である。

BB　『青色本・茶色本』（*The Blue and the Brown Book*）
PI　『哲学探究』（*Philosophical Investigations*）
Z　『断片』（*Zettel*）
RPP1　『心理学の哲学についての考察』第一巻（*Remarks on the Philosophy of Psychology, vol.1*）
RPP2　『心理学の哲学についての考察』第二巻（*Remarks on the Philosophy of Psychology, vol.2*）
LW1　『心理学の哲学についての最後の手稿』第一巻（*Last Writings on the Philosophy of Psychology, vol.1*）

（1）Rush Rhees：ここでは「何が同じで何が同じでないかの規則がないのである。正しいこととそうでないことの区別がないのだ。そして私が何を言おうと変わりがないのは、ここに理由があるのである。また私が何を言おうと変わりがないというのは、もちろん、私が何も言っていないことを意味している。」（Rhees, “Can There Be a Private Language?”, 1954, p.83.）
Norman Malcolm：「…私的言語にある「正しい」使用という概念は、もし私が自分の使用は正しいのだと信じれば、それが正しくなるようなものだ。規則はただの概念の印象に過ぎなくなるだろう。私の「言葉」は言葉ではなく、ただの言葉の印象になるだろう。」（Malcolm, “Wittgenstein’s *Philosophical Investigations*”, 1954, p.537.）
David Pears：「…記述された状況では、君が規則に正しく従っていたという印象の下にあることと、君が規則に従っていたという間違った印象の下にあるということの間に差がなくなるだろう。あるいは少なくとも、認められうる差は君にとってさえ何もないのだ。君が言うことはなんでもまかり通る。したがってこれが言語だとはとても言えないだろう。」（Pears, *Ludwig Wittgenstein*, 1986, p.149.）

（2）一次的・二次的の区別は、実際の言語使用の上に設けられた概念的区別であり、言語修得の生物学的段階が念頭にあるのではないことを断っておきたい。

（3）項目（4）に関して、語の意味はそれの使用であり、使用が変われば意味も変わるのだと「意味の使用説」支持者から反論があるかもしれない。しかもこの説はヴィトゲンシュタインにはじまるとされる。しかしヴィトゲンシュタイン自身は該当箇所で慎重にこう書いている。「我々が「意味」という語を使用する――すべてではないが――多くの場合、それはこのように定義できる。語の意味は、言語の中でのそれの使用である、と」（PI 43）。この箇所で彼が二次的意味を考えていたとは思えないが、しかしこの節を二次的意味に重ね合わせることはできる。そうすることはとりもなおさず、二次的意味の考察は、多くの意味の考察とは違った仕方で行われるべきだということを意味する。

（4）この点をより正確に言うなら、二次的意味は語を二次的に使用す

ることでしか表せない、とすべきだ。ここでは語の形ではなく意味が問題なのだから、ある語で示される二次的意味は、比較的トリヴィアルな意味で、意味が重なる別の語で示されうるからだ。例えば太い曜日と細い曜日について、「太い」と「細い」の代わりに「肥えた」と「痩せた」を使って構わないだろう。しかしそうした場合の「肥えた」と「痩せた」もまた二次的意味で使われるのであって、上で述べた二次的意味の特徴がこれらの語にも当てはまる。

(5) 二次的意味の言い換えについて、ヴィトゲンシュタインは次のように言っている。「…もし「母音eは黄色い」と言うとすれば、黄色という語は比喩的（bildlich）に使われているのではない」（LW1 799）。また「二次的意味は「転義的（übertragen）」意味ではない」（PI p.216g）。なぜなら「私は自分の言わんとすることを、「黄色」の概念を使うことなしには表せないからだ」。この考えの根底には、比喩的表現は比喩的でない表現との対比があるかぎりで比喩的なのだという、ヴィトゲンシュタインが好んで使う対比の有無という考え方がある。例えば「激しく怒る」は字義的表現だが、「爆発する」は怒りの比喩的表現になる。ここで後者がなんの比喩かと問われた場合に、前者の比喩だと答えられ、この対比ができるからこそ、かつ対比ができるときのみ、比喩概念が有意味なのだ、というわけである。この比喩・転義概念の理解には異論があるかもしれない。しかし「太い曜日」や「黄色い母音」を比喩的だとしても、それが一体何の比喩なのかと問われた場合、それを何か別の表現にできないことは少なくとも確かではないか。

(6) これらの学者については次の著作を参照されたい。Tilghman, *But Is It Art?*, 1984; Diamond, "Secondary Sense", 1991; Hanfling, "I Heard a plaintive Melody': (*Philosophical Investigations, p.209*)", 1991.

(7) M.ter Hark, *Beyond the Inner and the Outer: Wittgenstein's Philosophy of Psychology*, 1990, p.190.

(8) *Op.cit.*, p.164, p.166.

(9) Idiot savantの驚異的能力が「計算」と呼べるかの疑問については、例えばOliver Sacksを参照されたい。Sacks, "The Twins", 1985, pp.185-203.

(10) 「頭の中で」という概念が難しいものであることは、Anscombeが触れている。この難しさは子供の方に、より理解され易いようである。Anscombe, "Wittgenstein: Whose Philosopher?", 1991, pp.9-10.

(11) 夢の報告の言語ゲームについてのヴィトゲンシュタインの考えは、次の節に表されている。「夢が、夢を見る人についての重要な情報を与えることができると仮定すると、その情報を与えるものは、正直な夢の報告であろう。夢を見た人が目が覚めた後で夢の報告をするときに、記憶が彼を欺くかどうかという疑問は生じないのである。報告が夢と「一致」していることに対する全く新しい基準、ここで「正直さ（Wahrhaftigkeit）」とは明確に区別される「真であること（Wahrheit）」の概念を与える基準を、我々が導入しないかぎりは。（PI pp.222-3）」この節の直前では、告白の概念についてこう書かれている。「…真なる告白の重要性は、それがある過程を確実に、正しく報告するということにあるのではない。告白の重要性は告白から引き出される特殊な結果にあるのであり、告白が真であることは正直さという特殊な基準によって保障されるのである。」ここでは（告白や）夢の報告は、真偽が正しさの基準によって確かめられうる類の報告なのではないとされている。

なぜなら夢の報告が真でありうるなら、または「正しく」ありうるなら、それは客観的基準が保障するものではなく、報告者の正直さが保障するものであると言うのだからだ。するとここでは、真であることと真だと思っていること（つまり偽りの意図がない正直さ）の区別はできない。夢の報告は、このような言語ゲームなのである。そしてこの言語ゲームには、正しさと同様、それが間違っていることも、報告者の態度と独立に判断する基準がないのである。このように、本人とは独立の基準を参照し、正しさについて話すことができない言語ゲームは存在する。

(12) ヴィトゲンシュタインは、痛みに質があることを忘れてはいないが（cf.Z 472, 485）、これについて特に考察することはなかった。この論文では詳しく考察しないが、痛みの質の記述の言語ゲームも、言語の中での規則の位置づけを考えるうえで興味深いものだということを付け加えておきたい。痛みの質は、当人の報告と独立には確認できないであろう。つまり一般的に、痛みの質には、当人が正しいと思っている記述と、実際に正しい記述を区別するような、痛みの質の公的基準が欠けていると言えよう。これに関して次の言葉は示唆に富んでいる。「「突き刺すような、砕くような、焼かれるような痛み」はそれぞれ「短剣、ドリル、薪の燃えさし」が生じさせるような種類のものだ、というGilbert Ryleの説明は、事実の観察ではなく、説明ほしさによって動機づけられたものだ」（Hanfling, *op.cit.*, p.125）。また痛みの質の記述に公的基準を探すことが難しいことについてはFiserが触れている（"Privacy of Pain", 1986,特にp.5, p.13, p.15参照）。

(13) Hanfling, Oswald, "What does the Private Language Argument Prove?", 1984, pp.468-9.

(14) Cf.Canfield, "Private Language: *Philosophical Investigations* Section 258 and Environs", 1991. Canfieldも、感覚日記で正しさを要求しているのはヴィトゲンシュタインでなく、対話者の方であると考えている。彼によれば、対話者の要求が「内的に崩壊」するのであり、ヴィトゲンシュタインの側にはこれに責任を問われない。したがってヴィトゲンシュタインは意味の検証主義を主張しているのではないとされる。

文献目録

I. ヴィトゲンシュタインの著作

Wittgenstein, Ludwig, *Preliminary Studies for the "Philosophical Investigations" Generally Known as "The Blue and Brown Books"*, Oxford, Basil Blackwell, 2nd edn, 1969 (1st edn, 1958).

———, *Philosophical Investigations / Philosophische Untersuchungen*, G.E.M Anscombe, Rush Rhees and G.H. von Wright, eds., G.E.M. Anscombe, trans., Oxford, Basil Blackwell, 2nd edn, 1958 (1st edn, 1953).

———, *Zettel*, G.E.M. Anscombe and G.H. von Wright, eds., G.E.M. Anscombe, trans., Oxford, Basil Blackwell, 2nd edn, 1981 (1st edn, 1967).

———, *Remarks on the Philosophy of Psychology, vol.1 / Bemerkungen über die Philosophie der Psychologie, Band 1*, G.E.M. Anscombe and G.E. von Wright, eds., G.E.M. Anscombe, trans., Oxford, Basil Blackwell, 1980.

———, *Remarks on the Philosophy of Psychology, vol.2 / Bemerkungen über die Philosophie der Psychologie, Band 2*, G.E. von Wright and Heikki Nyman, eds., C.Grant Luckhardt and Maximilian A.E. Aue, trans., Oxford, Basil Blackwell, 1980.

———, *Last Writings on the Philosophy of Psychology, vol.1: Preliminary Studies for Part II of the Philosophical Investigations / Letzte Schriften über die Philosophie der Psychologie, Band 1: Vorstudien zum zweiten Teil der Philosophische Untersuchungen,* G.E. von Wright and Heikki Nyman, eds., C.Grant Luckhardt and Maximilian A.E. Aue, trans, Oxford, Basil Blackwell, 1982.

II. その他の著作

Anscombe, Gertrude Elizabeth Margaret, "Wittgenstein: Whose Philosopher?", in A.Phillips Griffiths, ed., *Wittgenstein Centenary Essays,* London, Cambridge University Press, 1991, pp.1-10.

Canfield, John V., "Private Language: *Philosophical Investigations* Section 258 and Environs", in Robert L.Arrington and Hans-Hohann Glock, eds., *Wittgenstein's Philosophical Investigations: Text and Context,* London, Routledge, 1991, pp.120-37.

Diamond, Cora, "Secondary Sense", in Cora Diamond, *The Realistic Spirit: Wittgenstein, Philosophy and the Mind,* Cambridge, Massachusetts, MIT Press, 1991.

Fiser, Karen B., "Privacy and Pain", *Philosophical Investigations,* vol.9, no.1, 1986, pp.1-17.

Hanfling, Oswald, "What does the Private Language Argument Prove?", *The Philosophical Quarterly,* vol.34, 1984, pp.468-81.

———, "'I Heard a Plaintive Melody': (*Philosophical Investigations,* p.209)", in A.Phillips Griffiths, ed., *Wittgenstein Centenary Essays,* London, Cambridge University Press, 1991, pp.117-33.

Malcolm, Norman, "Wittgenstein's *Philosophical Investigations*", *The Philosophical Review,* vol.63, 1954, pp.530-59.

Pears, David Francis, *Ludwig Wittgenstein,* with a new Preface, Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1986 (originally published: New York, The Viking Press, 1970).

Rhees, Rush, "Can There Be a Private Language?", *Aristotelian Society Proceedings, Supplementary Volume,* vol.28, 1954, pp.77-94.

Sacks, Oliver, "The Twins", in Oliver Sacks, *The Man Who Mistook His Wife for a Hat,* London, Duckworth, 1985, pp.185-203.

Ter Hark, M.R.M., *Beyond the Inner and the Outer: Wittgenstein's Philosophy of Psychology,* Dordrecht, Kluwer Academic Publishers, 1990.

Tilghman, Benjamin R., *But Is It Art?,* Oxford, Basil Blackwell, 1984.

To What Extent Is Language Governed by Rules?

Ken MARUTA

In philosophy of the analytic tradition, upon which Wittgenstein has had a great influence, there seems to be a widespread presupposition that language is essentially a matter of rules. This presupposition gives rise to a strong view concerning the role of rules in language. This is the view that can be summarized as follows: grammatical rules permeate language through and through; only through such rules, which we are to follow, can language function as language. The aim of this article is to question this view and defend an alternative, weaker view that language is not necessarily a matter of rules. Although the discussion will be based on Wittgenstein's writings, its point is intended to be fairly general.

I will first attempt to identify the stronger view of rules in a standard interpretation of Wittgenstein's "private diary" argument. According to this interpretation, the sign "E" in the diary is rendered meaningless for the reason that it lacks public rules explaining its meaning. That such an expression should have meaning is incompatible with the stronger view. Next, I will draw on what Wittgenstein called the secondary meaning of words. Various examples will be given, and conceptual characteristics will be illustrated. It will be pointed out that the use of words in secondary meaning lacks rules where those holding the stronger view would require them. The discussion then reverts to the "private diary" argument so as to suggest an alternative interpretation which incorporates the consideration of the secondary meaning. It will be claimed that, with a proviso, there is no sharp boundary between the secondary use of words and the use of "E" in the diary. The simple and straightforward rendition of "E" as meaningless seems premature and doubtful.

Key Words

rules, meaning, Wittgenstein, "private diary", secondary meaning